GOD EATER ―Alien apple―

Maitz.

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

銀色の裂け目よりもたらされた一つの果実。それにより、かの世界は新たな絶望と対峙することになった。　ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ×仮面ライダー鎧武

目次

GOD EATER ―Alien apple― prolog
ue ―――――――――――――――――――― 1

ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ　―Ａｌｉｅｎ　ａｐｐｌｅ―

ｐｒｏｌｏｇｕｅ

険しい山並みに埋もれ、今では人々に忘れ去られた土地。その曇天の中に立つ丘の上に、悪意が足を踏み入れようとしていた。

中空に浮かぶ銀色の裂け目。おもむろに金具を用いて押し広げられたその先には、一面の緑が広がっていた。

やがて、興味を無くしたかのようにさけめはその口をすぼめはじめた。

閉じた端から空気に溶けるように消え、何事もなかったかのように無くなるかと思われた、その時。

ぽろりと、毒々しい色の果実が一つ転がり落ちた。

程なく、空虚な、果実が落ちているだけの丘に足音が近づいてくる。

顔をのぞかせたのは、悪鬼の頭部、獣の体躯を持ち合わせる小さき神。

その歩行者は荒れ地にはあまりにも不釣り合いな果実を視界に捉え、何の気なしに捕食した。

数日後、人類最後の守り手の名を冠する砦の一つが、突如連絡を絶った。

その日を境に、人類の生存圏はまたしても食い荒らされることになる。

更に数ヶ月後、『２０７１』年…

極東支部とは異なる地で、人類の反逆により生まれた再びの小康状態。

しかし、その日常にも徐々にほころびが生まれていた。

「…ス２、聞…えま……」

ふと、風の音にそんな音が混じり、彼の意識を揺り起こした。

「アダムス２、聞こえていたら応答願います。もしもし？もしもーし？」

「はいはい、聞こえてるよ。そうやかましくすんなって。」
のんびりと体を起こし、傍らに置いた武器の柄を握りつつ答える。
あくびを漏らしている気配が伝わったのか、聞こえてくる声音に呆れが混じる。
「また昼寝ですか？出撃中は控えたくださいとあれほど
「それより、だ。仕事じゃないのか？いつもは寝てても何も言わんだろ」
「むう、中型種が一体、戦闘エリアを離脱。そちらへ向かいました。進行方向に居住エリアが存在するため、確実に仕留めてください。」
その言葉に対して、男はあくまで軽い態度を崩さない。
「アダムス2、了解っと。ちなみに……そこ、食い物ある？」
「ええ、農耕プラントが存在するはずです。フェンリルへの納入も行われていますよ。」
「ほうほう、そりゃあ大変だ。こりゃ気合い入れていかないとな。」
担ぎ上げられた大剣が光を受けて輝く。その刀身は緩く弧を描いており、色は黄緑のグラデーション。
ちょうど、とある果実を連想させるようだった。

人類の真価を問う細胞はとある果実によって歪められた。
新たな神喰らい達が紡ぐ物語は、果たして何処に行き着くのか…
―ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ　Ａｌｉｅｎ　ａｐｐｌｅ―